

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

悪天はライチョウ観察の最高の味方

前々号で紹介した長山協のライチョウ観察会に参加した。10月9日は、二つ玉低気圧が太平洋と日本海を通過するという最悪の天候。こんな天候の中、一般参加者も募って行なう観察会、果たして大丈夫だろうか？と、若干の不安をぬぐいきれず心の中で煩悶しながら、集合場所である乗鞍観光センターに向かった。強い雨が降っているにもかかわらず参加者は長山協関係者が7名、一般参加者が11名、取材1名。高校関係では、僕のほか志学館の横内さんと池工の藤田さんが参加してくださった。9時発のバスに乗り、豊平へ。11時、既に小屋入りしている中村先生の待つ「肩の小屋」へ向かう。

小屋では「この雨の中、どうしようか？」と尻込みしている我々を尻目に先生は大はしゃぎ。ガスが出ている雨降りとは願ってもない観察日和だというのだ。すでに先乗りしていた先生は、研究のため、まだ足環がつけられていない1羽のライチョウを発見、捕獲してあるとのこと。もうすでに我々は中村ワールドに誘い込まれていたのだった。

「これからそのライチョウに足環をつけますからご覧になってください。」と言って、先生は我々の目の前でライチョウに足環を付け、体重をはかる。550gのこのライチョウは昨年生まれた雄だということだった。13時30分、フィールドに観察に出かける。繁殖期を終えたこの時期のライチョウは群れで行動しているそうである。既に二つの群れを午前中に確認していたという中村先生が我々を案内してくれる。その途上ハイマツの下に置き去りにされた2個のライチョウの卵を見つけた。一度に5~7個の卵を産むライチョウは、一斉に孵化するそうだが、これは何らかの理由で孵化しなかったものだ。白い卵は鶏のそれよりは少し小ぶりである。やがて2羽のライチョウを発見。すでに夏羽から秋羽へと換羽したライチョウは雌と今年生まれた雛であった。乗鞍のライチョウは、観察のためすべて中村さんによって足環が付けられ、個体の識別が可能なのである。近くでライチョウの糞も採集。乾燥していたからかもしれないが、長さ5mm、直径1mmほどの灰色のそれは、僕の抱く鳥の糞のイメージとは少し違うものであった。膝下くらいのハイマツを隠れ家にし、そこに生える植物なら何でも食べるライチョウの生態を、実際に目の前の植物とライチョウ本人（鳥）を目の前に話してくださったので、非常に分かりやすかった。およそ1時間半、野外観察をした後、小屋に戻った。

休む間もそこそこに、2時30分からはおよそ2時間強に及ぶ講義。世界中のライチョウの中で、日本のライチョウが、いくつかの面で特異なものであること。基本的にライチョウという鳥がどんな鳥であるのか、またどんな生態をしているのかなど分かりやすく解説された上で、様々な観点から愛情をもってライチョウの話がされる先生の話に引き込まれた。世界最南端に隔離分布された日本のライチョウは、寒い気候に適応した鳥であるが故、日本ではハイマツ帯に棲息している。もし、年平均気温が1℃上昇したならば、理論上森林限界が154mあがることになる。そう考えると2℃の上昇では50%、3℃の上昇では20%しか生き残れない。加えて現在棲息地が南北アルプス、御嶽、乗鞍、火打に限られている日本のライチョウは、種自体の多様性も低く、何らかの外的理

由（たとえばインフルエンザ）が持ち込まれればたちどころに全滅の憂き目にあうことも予想される。30年前には推定3000羽いたとされるライチョウだが、現在はその推定法で行くと1653羽となる。ライチョウの減少の原因としては、登山者による影響、各地の山岳での減少、低山動物（キツネ、テン、ハシブトガラス等）の高山への進出、ニホンザルやニホンジカ、ツキノワグマなどによる高山植生の破壊、少ない個体数と低い遺伝的多様性、地球の温暖化などだが、今我々にできることで最も求められていることは、人と野生動物の棲み分け、緊張関係を回復することにあると考えられるということだった。そしてそれは、古来ライチョウを奥山という神の領域に棲むものとして、人間を恐れぬ極めて特殊な鳥（欧米では狩猟の対象だった）にしてきた日本の文化をもう一度見直すことでもある。日本の高山は規模こそ小さいものの、先進国の中で自然のままの姿でこんな環境を残している例はない。国際会議の場においても、日本のライチョウとその棲息環境を知った外国の研究者たちは、一様に驚きを隠さないようだ。実際牧畜文化の広がっているヨーロッパの「アルプの草原」に比べて日本の山は比較にならないほど多様性に富んでいるというのだ。そしてその何よりの証拠こそ、この環境に生き残っているライチョウなのだ。2時間という時間があっという間に過ぎた。

翌10日は、眼下の紅葉を眺めながら乗鞍山頂まで参加者全員で登った。予報では大荒れということだったが、ガスもあがり、時折穂高連峰も恥ずかしげに顔を覗かせてくれるというもうけものの登山になった。昨日の雨の中の先生のご苦勞と我々への自然の贈り物だったのかもしれない。この天気で大丈夫だろうかという当初の心配は文字通り杞憂で、この天気だったからこそ多くの収穫があったのはもっけの幸이었다。この駄文により、一人でも多くの方に日本のライチョウが、ひいては日本の高山環境がいかに貴重であるかの一端を知っていただければ嬉しいと思う。

秋・・・長山協の企画

ライチョウ観察会もよかったが、これから長山協では様々な企画を計画している。いずれも（その4はこれから）、長山協のホームページにアップされているので、詳細はそちらで確認の上、興味のあるものがあつたらぜひご参加を。

- ・その1 医科学委員会主催「障害予防のためのトレーニング・ストレッチング講座」：
10月31日（日曜日）、午前9時30分～11時30分、松本市勤労者福祉センター第1会議室にて。参加料500円。講師は長山協医科学委員会所属の理学療法士。
- ・その2 諏訪支部主催「八ヶ岳清掃登山」：10月17日（日）
- ・その3 事業部主催「長山協ミーティング」：11月6日（土）～7日（日）、須坂青年の家、懇親会（初日）と里山登山（2日目）。長山協名誉会長古原和美氏秘蔵の1964年の「ギャチュンカン登山」のDVD鑑賞会など。参加料3500円（1泊2食交流会費込み）・・・格安です。
- ・その4 国際部主催「海外登山研究会」：11月14日（日）、山岳総合センター、国際登山の報告と情報交換。

編集子のひとごと

来夏の遠征隊の骨格が固まった。具体化するためにはこれから乗りこえて行くハードルはいくつもあるが「高校生に夢を」語れるような企画にしていきたい。（大西 記）